

僕等は 侵略者の子供達だった

1946年、北京から引揚げ船で送還された少年の物語

木村愛二
Kimura Aiji



木村書店

僕等は侵略者の子供達だった

1946年、北京から引揚げ船で送還された少年の物語

木村愛二



木村書店



僕等は侵略者の子供達だった

木村愛二

——一九四六年、北京から引揚げ船で送還された少年の物語

kimura
shoten

——時代の始まり

僕は東京行の汽車に乗っていた。それは敗戦の混乱が最早、無秩序の故の生気さえも失って、大人達の眼の中には絶望か、さもなくば、薄汚い欲望しか見出せなくなっていた時期であった。ごたごたしたホームを一生懸命に走って、やっと見つけた座席は、後から乗り込んだ復員服の若者に割りこまれて、肘掛けに胸を押しつけねばならぬ狭さになった。だがこれは、僕が小さかったのだから仕方がない。離れて坐っていた母も、妹をあやしなから、そうなのですよ、と頷いていたのだった。

しかし、その小さな僕が傍目もふらずに読みふけていた本に眼を止める大人達の虚ろな表情はどうだっただろう。もしその中の誰か一人でも、あの本について、それとも僕の熱心さについて、一言でも口を開いてくれたなら、僕は昂然と頭を上げて何かを答えたに違いない。それがもし、大人達の興味を引かなかったとしても。

その本は三国志だった。そして僕にとっては、チカラさんの遺品でもあった。「中隊長、大きくなったらこの本をやるからな。これを何度も読んで三国志の英雄達に負けない立派な大人になるんだぞ、ええか。」

チカラさんはこう言って僕の頭を撫で、自らもその英雄の一人であるかのように雄々しく胸を張り、太い眉を上げるのだった。

そのチカラさんは死んでしまった。だが僕は何巻もの重い本を持ち帰ったのだ。

shoten

——僕等は侵略者の子供達だった

新中国の首都、北京、人民公園のある都。——僕が毎日のように訪れ、スケートをし、魚を掬った、あの湖のように馬鹿でかい池のあった公園も、それより少し小さいけれど、街の真中にでんと坐って、棗が沢山とれる丘を抱えこんだ公園、それに休日にはみんなでボートや遊覧船に乗りに行った万寿山公園も、それらは全て離宮として作られ、庶民を拒んでいたものだった。

その離宮の跡に僕等がいた。僕等は、万寿山の本当に底の砂粒まで透き通って見える水に戯れる侵略者の子供達だった。その時、北京は僕等のものだった。

今の、何もかも変ってしまったように思える新しい北京は、僕等のものではないのだ。

僕の北京はあの日に終わってしまった。

ただっ広い大通りも、迷路のようにまがりくねった細い胡同も、赤と緑のけばけばしい模様がまるでそのために家や門が作られてでもいるかのように所狭しと

kimura



交錯していたあの大小の家々も、たちまちに消え去ってしまったのだ。そして今では、僕の北京はあの最後に住んでいた胡同の大きな家の記憶としてのみ鮮やかに残っているのだ。

北京でも幾度か引越したが、僕はあの大きな家で日本が負けたことを知った。日本が戦争をしている、何者かと戦っているということは、僕等にとっては、時々高空に描き出される飛行機雲によって、それも教えられて初めてはつきりと形が与えられて、そうと知るだけだった。

それなのに、僕はあの日に、確かに敗れたのだ。その事実だけが、今となっては、僕が北京にいたことを確かにさせてくれるのだ。

※胡同^{フット}・・・狭い道、路地

shoten

あの日、古びた重い鋳打ちの木の扉をバラバラと叩くつづての音が、僕にとつての敗戦の知らせであった。その小石を投げていたのが、顔見知りの朝鮮人の子供であったことは僕を悲しい静かな怒りで満たしはしたが、僕はそれを誰に向ければいいのかは知らなかった。彼等の甲高い日本語の罵声、ぼんやりと、しかしなぜか、心の中ではつきりと意味が掴めたと思えるあの奇妙な、そして僕等の喧嘩のルールに外れた言葉、その激しい響きが最初から僕をうちのめしていた。

「お前等、アメリカ兵が恐くて外に出られないんだらう。」

僕はそれまでにアメリカ兵なんて見たこともなかったけど、そう言われて、何も言い返せなかったのだ。僕の手は、手垢で黒光りした鉄の把手をカタリと落としていた。

あの時僕は、大きな門の蔭の静まりの中に、中国人の門番の子と二人つきりだった。言葉の通じないその子とはかくれんぼと石けりしか一緒に出来なかったが、

それでも仲良しだった。でもあの時は、黙って顔を見合わせていただけなのに、僕等は話していたのだ。あの子は僕に、これもかくれんぼだよ、と言っていた。だから僕は静かに身を固くしていた。そしてつづての音が止んでしまっても、僕はあそこに立ちつくしていなければならなかったのだ。

時々覗き窓を開けて様子を見ていた胡同も、門の屋根の下と同じ暗さに包まれ始めた頃になって、チカラさんが帰って来た。

「今日は喧嘩しなかったようだな、中隊長。」

僕の頭を撫でながら言った。その言葉はいつものようだったけれど、その眼には優しい笑いがこもっていなかった。それをじっと見守っている内に、僕の視界はそれまでこらえていた涙でぼやけてくるのだった。

「どうした中隊長、元気がないぞ。」

いつもなら僕が泣きべそをかくと、どやしつけるチカラさんが、それだけ言うのと僕を肩に乗せて、母屋に向って歩き出した。

チカラさんばかりでなく家族の皆が僕のことを中隊長というのは、こういう訳

だ。僕等の国民学校では、朝礼や観閲式の時に、級長が小隊長、それから交代で中隊長、最上級の六年生の場合には大隊長が出来るということになっていた。僕は初めて中隊長になる時に、敬礼する手の甲をきれいにしようと思いでこすり過ぎて、結局赤チンだらけにしてしまった。その時ついたのが、赤チン中隊長というアダ名だった。それを言われるたびに当然、僕がカンカンになって怒るので、中隊長の方だけ残したのだ。

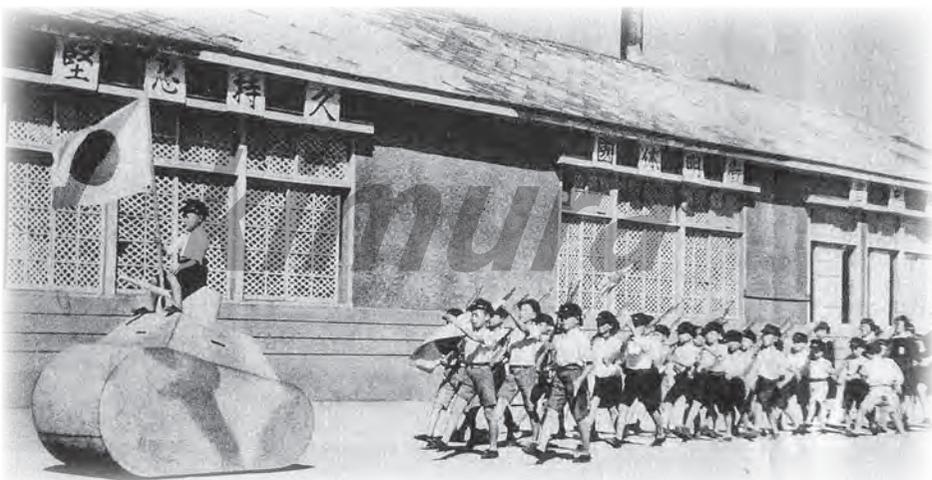
チカラさんはその時こういった。

「中隊長や小隊長は先頭に立つて突撃するんだぞ。勇敢な男じゃなけりゃいかん。アダ名にしても中隊長と呼ばれるからにや、それくらいの度胸をそなえとかんと笑い者にされるぞ。ええか、中隊長。」

だが僕はあの時、門を開けることさえ出来なかったのだ。僕はあの朝鮮人の子供達に始めから負けていたのだ。

あの日が何月の何日であったか、僕には分らない。だけど僕はあの日を鮮やかに思い出すことが出来る。万寿山の池でエビを掬っている時に落としたので、か

わりに新しく買ったばかりだった戦闘帽をいじりながら聞いた雑音ばかりの天皇陛下の放送や、夕焼けの校庭で沢山の紙を燃やしたり何かをこわしては力いっぱいプールの水に投げ込んでいた先生達の見馴れぬ表情などと結びついて、あの日の出来事が思い出せるのだ。そしてチカラさんの肩にまたがって見た母屋の構えを最後にして、あの日は終わった。そのあとには僕の北京は残っていない。僕が北京を去ったのは、だから、あの日に違いないのだ。



僕等はトラックで収容所に向った。引越しが好きだった僕は、初めてトラックに荷物と一緒に乗ることが出来たのだが、同時に、新しい経験をただ素直に面白がれない複雑な気持ちをも味わい始めていた。

田舎道の黄色い埃の中を、トラックは上下左右に小舟のように揺れながら走った。狭苦しい運転台に母と一緒に乗り込んだ父は、押し黙って不機嫌に見えた。間の窓を叩いてもろくに返事をしてくれなかった。するとチカラさんが、

「お母さんが心配なんだよ。」

と教えてくれるのだった。僕も前から、弟か妹が生まれるのだと聞いていたので、その意味はよく分った。運転手と父の間に、母はじつと身じろぎもせず、トラックが揺れると仕方なさそうに動いていた。僕はきつと眠っているのだろう、と思っただ。だからそれからは窓を叩くのは止めて、おとなしくまわりを見ることにした。

僕等のだけでなく、荷物と人をギツシリと詰めこんだトラックが前後に続いて

いた。それは砂漠を行くキャラバンに似て、静々と進んでいたが、古トラックの群が揺れて軋る金属性の音はもの淋しく広がっては消えて行くのだった。果てしれぬ黄白色の曠野がすべてを吸いこんでしまうのだ。

その広漠たる畑また畑の中の一本道は、明確な境界線を持っていなかった。車が行き、人が踏みつける所が、次第に道らしい形をとり、拡がっていったものなのだ。そしてそのあるかないかの境界が畑を大きく侵している所に、土饅頭が点在していた。時には小高く、棗椰子までめぐらせて、墓地らしく祠を祭っている所もあった。その道端の黄白色の群れの中に一つだけ茶褐色の湿った地肌を光らせている土饅頭を見つけた僕は、思わず問いを発していた。

「チカラさん、あれどうして色が違うの。」

「さあ、どうしてだろうな。」

チカラさんは首をかしげ、眉をしかめて僕の眼を覗きこんだ。それは、こんなことがわからないのかい、という時のやり方だった。

「あつ、新しいんだね。葬式があったばかりなんだ。」



僕は北京の大通りを行く中国の葬式を思い出した。みんながお芝居のように泣いていたのだった。まるでお祭りみたいだったのだ。

「中隊長どうした。部下が一緒じゃないと淋しいのか。」

チカラさんが陽気な声で僕の背中をどやしたが、僕は友達のことなど考えていたのじゃなかった。急に母のことが心配になって来たのだった。母は前にも、弟が生まれるのよ、と言っておきながら病気になるって駄目だったのだ。今度病気になるったら、死んでしまうのではないかと思えた。

shoten

広い畑の中の一本道に疲れ果てたころ、小さな街が見えてきた。城壁のない街を見るのは初めてだった。僕は運転台の屋根によじのぼって眺めた。

「あそこに收容所があるの。」

「ちがう、まだ遠いんだ。」

チカラさんが腕時計を覗いてから答えたので、僕は不安になった。

「あと何時間位。」

「はつきりは分らん。心配するな、中隊長。夕方までには着くにきまっとる。」

チカラさんは僕の背中をどやし、頭を撫でてくれた。だが僕は心配せずにはいられなかった。内地にいた時、祖父が死んで悲しかったのを思い出した。あの時から祖父に代って、チカラさんが肩車をしてくれるようになったのだった。チカラさんは曾祖父の郎党の孫だという話だ。身寄りがなくなって祖父が引き取ったのだ。だから祖父が死んだ時、一番悲しかったのがチカラさんだった。葬式の時

には、いつも元気の良いチカラさんがオイオイ泣き出したので、僕は余計に悲しくなったのだ。

僕はチカラさんを振り返ってみた。太い眉をくつつけて、近づいてくる街を覗んでいるのだった。少し恐かった。いつもの僕ならチカラさんが真面目な顔をしていたりすると、鼻をつまんで笑わせるのだが、その時には出来なかった。それで僕も一緒になって街を覗んでやった。前のトラックの立てる埃で時々見えなくなったが、また一段と大きくなって現れるのだった。よく見ると、大きな建物こそなかったが、それは北京の近所と似ているようだった。

だがそこには僕等の胡同はないし、あのいつものお茶ばかり飲んでいた門番や、その娘のクーニャンや、男の子はいないのだ。あのクーニャンは雑巾を縫うのにも返し縫いをするとか、針をいつも胸に沢山さしているとかいって、母が笑っていたが、僕にはとても親切だった。よくスケートに連れていってくれた。あのスケート靴は、母があまり荷物は持っていけないというので、惜しかったけど門番の子にやってきた。渡そうとすると、怒ったような顔で僕を見つめるばかりで、

なかなか手を出さなかった。日本語の分るクーニヤンが何度も礼をいうので僕は困ってしまった。あの子は僕より小さいから、あと二、三年は使えるだろうと思っただが、一緒にすべるとは出来ないのだ。もう彼等に会うことはないのだ。あの家は大きくて、夜になると便所が遠いのがいやだったけど、かくれんぼには都合がよかったのに、もう戻ることはないのだった。



街の子供達は見覚えのない旗を振っていた

街の狭い通りをトラックは走り続けた。僕が感じていたよりも街は広がっていて、家並みが途切れたと思うと、また同じようにごみごみした石や土の姿を現わした。そのうち、学校のように大きな建物の前でトラックの群は止った。父と運転手は他の大人達と一緒に建物の中に入ってしまった。僕は飛び降りると運転台に駆けつけた。母はまだ眠っているように思えたが、そうではなく、

「中隊長殿、お元気ですか。」

いつもの声で言った。

「お母さんは大丈夫なの。」

「お母さんは平気よ。心配しないでいいの。」

僕は母の身体の具合が気になって急いで降りて来たのに、お元気ですか、などと逆に聞かれて、子ども扱いされるいまいさを覚えたが、母が意外に元気な声を出したので安心もした。そこへ父が戻ってくると、「此処で昼食だ。」と言っ

で、母を抱くようにして降ろした。ふだん見かけたことのないやり方だから、やはり母は弱っていたのだ。

昼御飯がすんでトラックに乗りこんで見ると、いつの間にか道の両側に旗を持った子供達が列をなしていた。日の丸と見覚えのない旗をみんな両手に握っているのだ。お祭りのようだったが、万国旗を張りめぐらしているのでもなかった。チカラさんにきくと、返事がなかった。むっつりしていて、無理にきいてはいけないような気がした。

チカラさんはトラックが動き出すと、旗を振る子供達に向かって、手を振り始めた。僕もわけは分らなかったが、その中国の子供達に手を振った。みんなニコニコしているの、僕もつられて笑顔になっていた。だがチカラさんは笑ってはいなかった。子供達が見えなくなるまで手を振っていたが、チカラさんの横顔は怒っているように思えた。僕の方を見ようとしなかったから、泣き出しそうな顔だったのかもしれない。僕にはなんとなくそう感じられたのだ。あの日以来、僕はチカラさんが、祖父の葬式の時のように、オイオイ泣き出すのではないかと感じ続けていたのだ。



収容所の水はきれいでおいしかった。母は着いてまもなく元気を取り戻し、その水を豊かに使って食器を洗うのだった。そして汚れた手を洗いにいく僕に万寿山の水だと教えてくれた。あのエジまでも透明にしてしまう万寿山の池の水が流れて来ているのだ。母は続けて、日本に帰れば何処でもこれ位にきれいなおいしい水が湧き出している、というのだった。僕は内地の小川の水を思い出した。公園はどんなのがあったか覚えていなかった。だが、きっと万寿山のように広いのが沢山あるに違いないと思った。

収容所は道路を挟んで両側に拡がっていた。僕等のいた側には濁ったドブ川が流れていた。そして両方とも鉄条網で囲まれ、向い合った入口には中国兵が鉄砲を持って立っていた。小川は濁ってねずみ色だったが、それでもたんねんに掬っていくと小さい魚が取れるのだった。収容所で出来た友達の子ビと、毎日のように掬いに行った。他にすることもないのだ。タバコの空箱を潰したメンコも流行っ

た。僕等は近所を回って空箱を集め、取ったり取られたりを繰り返した。学校がないので、僕のランドセルはそのメンコの入れ物になった。僕はそれを満たすことを夢見た。僕等は新しい遊びを考え出すのに熱心だった。何しろ遊ぶ以外にすることがないのだ。そして何かといつては喧嘩になった。すると、大人達は学校が必要だと言い、

「日本は戦争に敗けたんだから、喧嘩なんかしてはいけないよ。」
と言うのだ。これが以前だったら、僕等が喧嘩していても、ずるいことさえないなければ、誰も止めなかったのに、なぜ戦争に負けると喧嘩してはいけなくなるのかわからなかった。だが、大人達にそう言われると、なんとなく元気がなくなつて、口喧嘩だけで背を向けてしまうのだった。

僕は喧嘩が好きだったから、面白くなかった。意気地なしになったような気がした。以前なら負けて帰つても、チカラさんが赤チンをつけてくれながら、

「今日は負けたらしいな、中隊長。そうか。よし。負けてもええんだ。堂々と闘つたろうな。よし。男の子には意地つてもんがなくなっちゃいかん。そうだな、中隊長。」

こう言って僕の背中をどやしたのだ。だから僕は負けてもくやしくなかったし、勝った時だって、相手がずるいことをしなかったら、すぐに仲良しになれるのだった。

「チカラは若僧のくせに良いことを言う。」

と父が言っていたから、チカラさんの言うことを聞いていれば間違いはないと思っていた。チカラさんは僕の叔父さんであり、兄貴だった。だがそのチカラさんは、収容所へ入って以来、僕が何か聞いてもはっきりした返事をしてくれないし、向うから話しかけてくることも少なかった。

「チカラさんはね、日本が戦争で負けたことが残念でしかたないよの。」

と母は言った。チカラさんは残念だから考え込んでいるのだろうか。きっと学校の先生達のように何かをぶちこわして、投げつきたい気持なのだろう。僕はそんなことを想像して、僕自身も重大なことを考えている気分になった。しかしそれは面白いことではなかった。街で兵隊さんに会って敬礼したり、観閲式の指揮をとったりすることの方が気分が良くて、面白いと思ったのだ。



収容所の建物は学校のようなだったが、部屋の大きさは色々だった。以前は日本軍の駐屯地だったという話だ。僕等が入った所は講堂のように広いコンクリートの部屋で、そこに運んできた畳を敷き、荷物を壁がわりにめぐらせて区切っていた。

隣には父と同じ会社の、近所にいたこともある人の家族がいた。いつもニコニコしている小父さんと、口数の少ない小母さんに、僕より一年下の女の子の三人家族だった。その女の子はいつもメソメソして扱いにくかったので遊ばなかった。二年の時まで同じ組で、絵の上手な少しお転婆の女の子とは仲良しだったが、三年になってからは男の組と女の組とは別になったし、それにもう何処にいったのかわからないのだ。収容所でまた一緒にあった友達もいたが、大部分は別れてしまった。内地に帰る友達のために送別会をやったこともあったが、僕等は何も言わずに別れてしまったのだ。

隣のニコニコしている小父さんは、よく小母さんに叱られていた。小母さんの方が強いようなので僕は驚いた。それでも小父さんは平気で、外に出ると僕等に、

「坊や達、喧嘩なんかしないで仲良く遊ぶんだよ。」

なんて言っていてニコニコしていた。他の大人達は大抵、父やチカラさんのように黙りこくって不機嫌だった。イライラしているようだった。そのくせやはり、僕等に喧嘩するなと言うのだった。

そのうち隣の小父さんは、日本は戦争に負けて、みんなアメリカやイギリスと仲良くしなくてはいけなくなっただから、英語を教えよう、と言い出した。他の大人達も賛成したらしく、畳を少しずつ集めて教室を作った。子供達は最初からみんな集った。学校がなくて退屈を覚えだしていたのだ。先ず、サンキューベリマッチ、というのを教えてくれた。有難うございます、という意味だった。僕は外国の言葉を覚えるのは面白いと思った。だがチカラさんは、

「あんな奴が英語を教えるかね。戦争に敗けてサンキューベリマッチもないものだ。」



shoten

と呟いているのだった。僕はチカラさんが他人の悪口を言うのを初めて聞いて、よほど不愉快なのだろうと思った。考えてみると、チカラさんは前から隣の小父さんが嫌いだったようにも思えた。それで僕はなんとなく、英語を習うのを止めてしまった。

食糧は支給してくれたが、アメリカでは家畜用だという噂のトウモロコシの粉が大部分だった。だから北京で用意してきた米がなくなると、鉄条網越しに中国人と物々交換して、米や高粱を手に入れた。僕はチカラさんと何度かそこに行つた。チカラさんは中国語がうまいので、よその分まで頼まれるのだった。

鉄条網の内側は以前は錬兵場だった広い原っぱだが、外側もクリークを間にはさんで、荒地が続いていた。中国人達はそのクリークを小舟で渡ってくるのだった。そして中国兵が見廻りに来ると、さっと離れるのだった。別に怒られるという事はなかったが、そういう時にこちらの品物だけを取って逃げられてしまうこともある、とチカラさんが言っていた。だから余計にチカラさんのように慣れた人に交換を頼むことになるのだ。

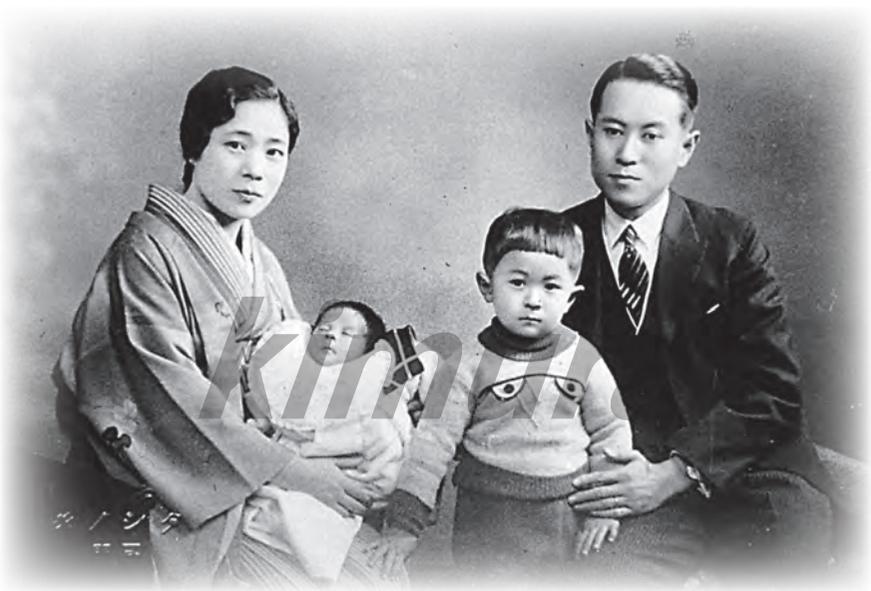
正月用にもち米が配給された。元気の良い大人達がそれを搗いた。僕はチカラさんが振り上げ振り下す杵の音を誇らしく聞き、正月の近づきを喜んだ。色の黒

い粉だらけの餅ではあったが、みなはその一かけらずつに、日本に帰る思いを噛みしめるのだった。それに正月になって、中国の偉い人が来て演説をしたので、もう日本に帰る日を安心して待てる、というなおさら浮き立った雰囲気も生れた。チカラさんは薪をけずってコマを作ってくれた。すると近所の子もせがみだしたので、しまいには手にまめが出来る程だった。原っぱにポツリポツリと寒さをかこっていた雑木で竹馬を作ることを見せてくれたのもチカラさんだった。それは釘を打つので折れやすかったが、僕等は柔毛を房々とのぞかせる防寒帽で寒さを忘れて跳ねまわった。ドブ川もクリークも水を張って、僕等に置いてきたスケート靴を思い出させた。それでも僕等は運動靴のままドブ川の氷に飛び乗った。よくころんだが面白かった。鉄条網をくぐって、クリークの広い氷の上を滑りたかったのだが、それは許されなかった。

二月になると母が入院したので、ドブ川の氷を横目で見ながら、反対側にある病院に通うのが僕の日課になった。湯タンポを運ぶのだ。夕方に熱湯を入れて、朝は途中で冷えた中身をぶちまけながら持ち帰るのだ。新しく生れてくる弟か妹を期待して僕は責任感から急に大人になったようだった。その上、僕等は男手だけで食事の用意をした。隣の小母さんも時々手伝ってくれたが、貧しくまぢまぢな材料のために、一緒に料理することは出来なかった。チカラさんはカレーライ스가得意だった。僕は大騒ぎして手伝いながら、誇らしく張り切っていた。

この充実した時は、まもなく頂点を極めることになった。僕の妹が生まれたのだ。真赤な湯気の立つ顔をしかめて泣きわめく小さな妹だった。チカラさんは僕のことを、これからお兄さんとよぶことにしよう、と言った。

「兵隊さんがみんな負けちゃったのに、中隊長が一人だけ残ってちゃおかしいからな。」



僕は中隊長と呼ばれるのも、威勢が良くて悪い気はしなかったのだが、妹が来たのだから、お兄さんは満足だった。

「うん、いいよ。」

と僕は答えた。すると看護婦が、

「お兄ちゃん、おいくつ。」

なんて気取った口をきいたので、急に面白くなくなった。しかし、妹を抱いてあやしている看護婦を怒るわけにはいかなかった。

小さい妹には、和代、という名がつけられた。平和な時代になったから、と父は説明してくれた。戦争が終ったら平和になるのだ。戦争は国と国との喧嘩だから、平和になると、国と国は仲良しになるのだろうと思った。

shoten

暖かくなって、引揚げ船の噂が始めた

母が退院し暖かくなってから、使わなくなった湯タンポは炊事場の隅にころがっていたが、引揚げ船の噂が始めた頃、チカラさんの考えで、水筒の代りに持っていこうということになった。僕が、何だか汚いな、と言うと、砂で内側を磨けばいい、と言うのだ。それで僕とチカラさんは毎朝駆けっこをすることにしたら。真鍮の湯タンポに砂を入れ、代わる代わるに持って走るのだった。

「何もしないと身体がなまっていかん。」

とチカラさんは言っていた。始めた次の日からチビも加わった。僕が自慢してやったら面白がって、入れてくれとせがんだのだ。

原っぱにはとどころ砂地があった。蒙古風で運ばれてきたものに違いない。空が真黄色になって太陽もかすみ、戸外に一步も出られない薄暗い日々が過ぎたあと、そこらじゅうが砂だらけになる。北京の家でも石畳の庭を掃いて砂場をつくったものだった。僕等は途中で何度も、黒ずんだ光沢を帯びて出てくる砂を入

れ換えた。その砂が少しずつ黄色い光り方をするようになって、チカラさんは急ごうとしなかった。

「他に何もすることがないんだからな。」

と呟いて淋しそうな笑顔をみせるのだった。父がチカラさんのことを働き者だ、と言っていたから、きつと仕事がないのが辛いのだろう、と思った。

チビは毎日やって来たが、いつも僕等より遅れて走っていた。砂を入れ換えている間に追いついて来てはハアハアと仔犬のように舌を出し息を切らしていた。僕等はそれを見てわざと、急いで出発したりするのだった。

チビは僕の家来のようにいつの間にか僕の傍にいる子だった。魚捌いにはカンカラを持ってついて来た。僕が喧嘩を始めそうな時にはかならず心配げな顔を見せていた。そして大抵の遊びには味噌づかずに甘んじていた。僕はチビがいることも、いないことも気にとめたことはなかった。チビはそんな子だったのだ。僕等はだから、あの時にも全然チビのことは気にしていなかった。砂を入れ換えながら、パタパタと追いついてくる足音を聞こうと振り返ったときにはもう、チビ

は鉄条網をくぐって、クリークの氷の上に降りていた。

チカラさんは湯タンポをほうり出して、走った。僕も懸命にそれを追いかけた。

「チビちゃん、あぶないよ、氷の上に乗っちゃいけないよ。」

「チビ、駄目だぞ、戻って来い。」



僕にも危険がよく分っていた。氷は毎日溶けては薄くなっていた。ドブ川でも落ちこんだ子供がいたし、クリークの氷は物々交換に来る中国人の舟に何度も割られて、一層弱くなっている筈だった。チビはそんなことを気にする様子もなく、悪戯っぽい笑いを見せて振り返り、向う岸を指すのだった。独りのチビは味嘈っかすではなかった。誰もいない広いクリークの氷の上をチビは力いっぱいすべっていた。だが真中辺で、水は鋭い音を立てて裂け目を走らせた。チビは音もなく倒れ、その割れ目に姿を消した。そして次の瞬間にはチビを呑みこんだ氷はもう、元の位置にかえって、持ち上げた水をゆるゆると振るい落としていた。

チカラさんは鉄条網をくぐろうと素早く身をかがめた。運動なら何でも来いという若々しいチカラさんにとって、それはいともたやすい動作に違いなかった。だがそのために慎重さを欠いていた。チカラさんは駆けつこのほてりをさまそうと、皮ジャンパーの胸をはだけていた。そのことに気を配る余裕がなかったのか

もしれないが、ともかく忘れていたのだ。鉄条網のトゲは先ずその裏のすり切れた羊の毛皮にしっかりと喰いいつて、チカラさんを引き戻した。そしてチカラさんがいきり立って引っぱると、表の古皮に固くささってしまったのだ。あせって身をもがくチカラさんの頬は紅潮し、眼尻は引き上げられた。

僕は言葉にならぬ叫びを上げ、全身の血をたぎらして焦った。しかし鉄条網は杭までふるわして怒り猛っていた。僕は近づくことさえ出来なかった。いつものほがらかな優しいチカラさんは其処にいなかった。そして狂ったように血だらけの手を振りまわしている若者は僕の存在を無視しているようだった。僕はうなり声を立てる鉄条網のトゲを恐れたのではなかった。ただそこには、僕の理解を越えた凄じいものがある。僕を寄せつけなかったのだ。隣り合った杭がメリメリと音を立てて倒れた。チカラさんは倒れた鉄条を引っぱってなおも闘っていた。

僕はその闘いとは違う激しい物音が急速に近づいてくるのを感じて振り返った。ふらさげた鉄砲をカタカタと不吉にやらして、牛のように頑丈な中国兵が走ってくるのだ。僕はそれまでに荒れ狂っていた恐怖の予感がはじめて形をとり、僕の全身を侵すのを知った。

しかし中国語の罵声は、僕の上を通り越して、チカラさんにあびせかけられたのだった。チカラさんはたゆみなく闘い続けていた。だが狂ったように暴れまわった結果は、いささかも良くなっていなかった。チカラさんは何も聞かず、何も見ず、考えることすら止めて、鉄条網だけを相手としていたのだった。いくら怒鳴っても、その訳の分らぬ闘いを止めさせることが出来ないのを知った中国兵は、銃先でチカラさんの注意を引こうとした。だがチカラさんは、背中をこづかれると、いらだたしげにはねのけるのだった。

僕は全身の骨という骨がくだける程の恐怖に押しひしがれていた。その時、乾いた銃声が耳元をゆるがし、僕の心の鉄の鎖を断ち切った。それは威嚇に過ぎなかったが、僕はすでに傷ついたチカラさんを守るために、その鉄砲に飛びついた。しかし僕の小さな身体は大男の中国兵につきのけられ、鉄砲はその凶悪な重みを彼の手に移して、僕を嘲笑っているのだった。僕と同じく銃声によって狂気をふ

りはらわれたチカラさんは、本能的な沈着さを取り戻して、ジャンパーを脱ぎずることに気付いた。そして一瞬ののちには、傷だらけのチカラさんは血走った眼を据えて、雄々しく立ち上がった。

銃声が再び、今度は鈍く響いた。中国兵はそれを後じさりしながら放ったのだった。威嚇射撃は僕等の恐怖と狂気を中国兵に移し変えていたのだ。チカラさんは胸を張った姿勢のまま、ゆっくりと後ろに倒れた。それは皮ジャンパーをくわえこんだ鉄条網の上であった。

しかし二度目の銃声はその結果の重大さとともに、中国兵自身をも混乱から引き戻した。そして続けざまの不吉な響きにおびえた大人達が原っぱに押し寄せ、荒れ地をすかして虚ろな眼をひきつらせた時、そこにはひざまずいた大男の中国兵と僕の姿があったのだ。中国兵は鉄砲を投げ捨て、チカラさんの胸に手を当てていた。僕は立っているのがやっとだった。何も考えてはいなかったが、何かが激しく僕の内部を縦に貫き続けていた。

大人達の中から父が走り出て来て、無言で僕の肩を掴んだ。こわばった父の顔

を見上げて、その間いかけ眼にぶつかった時、はじめて僕は泣き出したのだった。そしてクリークをふりかえって訴えた。チビが氷の下に落ちこんでいるのだった。大人達はそれを聞くと、倒れた鉄条網とその上のチカラさんを乗り越えて、クリークの岸に殺到した。その群に哀願のひびきで中国語が投げ掛けられたかと思うと、短い返事の終るのも待たず、中国兵が綿入れの制服のまま氷の上に飛び降りるのが見られた。すでにひびの入った氷は大男の中国兵によってバリバリと押しつけられ、水面をあらわした。

——僕は誰にも構わずにベッドの傍らに立っていた

中国兵に抱え上げられたチビはすぐに病院に運ばれたが、息の絶えたチカラさんをも運ばねばならぬことに大人達が気づくまでに、長い虚ろな静寂の時があった。その間中、僕はクリークの碎かれた氷を見つめていた。涙はすぐ乾いたが、はっきり見えるものは何もなかった。そして僕はとぼとぼとチカラさんの担架のあと

について歩くのだった。

僕は誰にも構わずにチビのベッドの傍らに立っていた。そこにはまた、泣き崩れる若い中国兵の顔もあった。彼は両手を握り合わせてひざまずき、あの頑丈な大男らしく見えなかった。仲間の中国兵達がやって来て、泣き濡れたままの彼を引き戻し、連れ去った。それを見送る僕の肩を大人達が捉えた。彼等は僕の断片的な言葉を種に、無駄な会話を始め、困惑をまぎらわせようとしていた。

「どうしてあの気のきいた若者が、……。」

「どうして中国語のうまい彼が、……。」

と虚ろな囁きが病室をざわめかせた。だがチビの紙のように白くなっていった冷たい身体が暖められ、注射を受け、その顔に血の気が戻ってくると、大人達も元気づいた。そして僕はもう、誰から質問されることもなく、黙ってそこを離れたのだった。

僕はチカラさんの暗い顔色を気にする必要がなくなった。中国兵達は以前と同じようにぼんやりと門を守っていた。何を考えているのか、いくつぐらいなのか、僕には関係のないことだった。ただ、その鉄砲だけが以前と違って見えるのだった。

チカラさんの葬式のあとで、父は僕の頭を撫でながら、ポツリと言った。

「お前にはまだ難しいかな。」

僕は黙って前方の空を見ていた。何も恐れることはなかったが、緊張していた。

「チカラさんはね、これから子供の時代だ。子供達だけがこれからの日本を作り直していけるんだ、と言っていたよ。あの二、三日前のことだよ。子供達と一緒に遊んでいる時が一番楽しい、なんて言ったんだがね。」

僕は静かに首をめぐらせて、チカラさんの墓をみやった。それは収容所の荒地の片隅の土饅頭の群の中に、新しい地肌を茶褐色にしめらせ、うずくまっていた。誰かが作った白木の卒塔婆が陽をうけて輝いていた。その上に鮮やかに記されたチカラさんの戒名を前にして、僕等は長いこと立ちつくしていたのだ。僕の肩におずおずと手のをせて、あの大男の中国兵もいた。黒い絹の長衣を着て、彼は静かに泣いていた。そしてその細い眼にたたえられた涙の一粒一粒が僕の心を静めてくれたのであった。



帰還船の来る港への移動が始まった。僕等は収容所では最後の組だった。妹を産んだばかりの母の身体を気づかって、父がそれを希望したのだ。僕は友達に別れを告げるのに忙しかった。友達は毎日へっつていくのだった。ある朝、しばらく会わなかったチビが、息せきききって駆けこんできた。タバコの空箱のメンコを持てるだけ手にしていた。

「みんなゴミダメに捨ててっっちゃうんだ。まだ沢山あるよ。」

僕は黙ってそれを受け取った。チビは無邪気に緊張して言葉を続けた。

「僕はこれからトラックに乗るんだよ。チカラさんは何処にいるの。」

チビは何も知らされていなかったのだ。僕はそのことに気づくと、なおさら黙らざるを得なかった。しかしチビはひるまなかつた。

「僕はね、クリークに落っこつた時、チカラさんに助けてもらったんだって。お礼を言っていきたいんだ。」

僕はやっこの思いで口を開いた。

「チカラさんはいまよそに行ってるんだ。」

そして重々しくつけ加えた。

「チビ、お前も立派な大人になるよ
うに、って言ってたぜ。」



波止場の長い行列はいつこうに進まなかった。僕はそれらをじつと堪えていた。妹を背負い、水の一杯入った真鍮の湯タンポと三国志の風呂敷包みを両手にぶらさげていた。父は何度もまた買ってやるからと言ったが、このチカラさんの遺品を手離す気にはなれなかった。それは北京で門番の子にやってきたあのスケート靴などとはまるつきり違ったものであった。僕等の持つて帰れる荷物は限られていたが、僕はその分だけ余計に負担すると言い張ったのだ。だから僕はそれらの重さに堪えなくてはいけなかったのだ。

行列の横をアメリカ兵が陽気に往き来していた。その中の一人は僕の気づかったとおりに近寄って来た。港についてから何度もあったことだが、そのアメリカ兵も笑顔で僕の背中の妹を覗き込み、英語であやした。僕はそのたびに妹が足をばたつかせるのも手伝って、そんなアメリカ兵の気紛れがわずらわしかったのだ。だがその時行列が動き始めると、そのアメリカ兵はなにやら呟いて僕にもほ

えみかけ、両手の荷物を軽々と奪い取り一緒に並んで歩き出した。

行列がのろのろ進み、また淀んだ時、アメリカ兵は僕に荷物を戻した。すると父は、

「サンキューベリマッチ。」

と言うのだった。僕はその意味を知っていた。チカラさんはあの時、戦争に敗けてサンキューベリマッチもないもんだ、と言った。父は戦争に敗けたからそういったのではなかった。僕にはそんなことはよく分ってい





た。だけど、その言葉はかなしい響きを感じさせるものであった。しかし、そのアメリカ兵は喜び、僕の頭を撫でて、意気ようようと立ち去るのだった。

妹の和代はタラップを上る時、足をばたつかせて泣きわめき、僕をよろめかせた。僕はその重みを黙ってこらえていた。汽笛が妹の泣き声を消し、僕を無感覚にするのだった。

shoten

東京の電車は物凄い混みようだった。きたならしく狭い車内に、うす汚れた大人達がものうく押し合っていた。窓にへばりついていていた僕の眼には、東京は破壊されたビルディングと焼けトタンの急造バラックの群として展開していくのだった。

帰国してから暫くの間ころげこんでいた、田舎の親戚の家のワラぶき屋根の重量感と、この焼け跡の都会を思い較べる僕にとっては、もう一つの夢を失うまいとする努力も空しく感ぜられた。東京で仕事が見つかった、という父からの報告に、久し振りに眼を輝かせた母は誰にいうともなく呼びかけたのだった。

「さあ、また始めからやり直すのよ。東京でやり直すのよ。」

だから、僕の夢として残された東京は、新しい未来を覗かせていたのだ。そしてそこには何かがなくてはならなかった。北京の公園や、田舎の小川や、茸狩りの森に代る何かがある筈だったのだ。

僕は何物をも見逃すまいと、窓枠にしがみついた。大きな建物も時には現れた。母は僕にその名を覚えてくれるのだった。しかし、僕の探していたのは、あの万寿山の御殿のように美しいものだった。そして僕は、あの池のように澄み切った流れを見つけて、北京の夏のように戯れたかったのだ。だが線路の傍らに濁った堀を見つめる僕自身は、すっかり変ってしまったように思えた。僕は崩れた石垣に身をささえている、焼けて裸になった柳の木を、眼が痛くなる程、見つめているのだった。

kimura shoten

◆引用写真の出典

- 7頁・『北京の路地』 徐勇 新潮社 一九九四年四月二〇日
 原典の写真説明：胡同 フォトン39 垂花門(二)の門。四合院住宅の内庭の典型的な門の形式である)
- 11頁・『図説』戦争の中の子どもたち』 山中恒 河出書房新社 一九八九年八月一日
 五一頁「内地・外地・占領地の子どもたち」より引用
 原典の写真説明：校庭を行進する朝鮮の国民学校の子どもたち ©「週刊少国民」四三年四月二五日・朝日新聞社
- 15頁・『新版 私の従軍中国戦線』村瀬守保写真集へ一兵士が写した戦場の記録』
 村瀬守保 日本機関紙出版センター 二〇〇五年三月一〇日
 第三部 徐州作戦―“麦と兵隊” 六四頁より引用
 原典の写真説明：両側に家の立てこんだ、狭い道で敵の待ち伏せ攻撃にあうと、恐怖だけが先立って、夢中で脱出する事だけしか考えられませんでした。
 (避難民のトラックではなく、日本軍の行軍トラック)
- 18頁・同右 60頁 新潮社
- 21頁・『母と子でみる 51 二〇世紀の戦争I』写真・共同通信社 草の根出版会
 二〇〇一年三月五日 九二頁より引用

- 25頁・筆者の幼年時代
 29頁・『従軍カメラマンの戦争』写真・小柳次一 文／構成 石川保昌 新潮社
 平成五(一九九三)年八月五日 一一三頁より引用
 原典の写真説明：二〇年の元日は長沙付近の小学校で迎える。ルーズベルトをつく餅つき。
 (ルーズベルトはアメリカ合衆国三二代大統領)
- 33頁・筆者の幼年時代の家族写真
- 37頁・筆者の幼年時代
- 45頁・『母と子でみる 52 二〇世紀の戦争II』写真・共同通信社 草の根出版会
 二〇〇一年四月二四日 九二頁より分割引用(全体写真は八四頁に掲載)
 原典の写真説明：湖南省の戦線で中国軍の捕虜となった日本兵II一九四四年二月二日(AC ME)
- 47頁・『在外邦人引揚げの記録』毎日新聞社 昭和四五(一九六〇)年七月七日
 二〇一―二二頁より引用

この写真は『戦後引揚げの記録』若槻康雄 時事通信社 一九九一年二月一〇日にも掲載されている。

『戦後引揚げの記録』の写真説明「満州引揚げ基地」口島にて 乗船を待つ引揚者の長い列。

この付近で半月待つ間に何人も亡くなったという（昭和二年七月・同地棧橋）
撮影者：飯山達雄。（九二頁に経歴）

49頁・『一億人の昭和史 4 空襲・敗戦・引揚げ 昭和二〇年』毎日新聞社 一九七五年

二〇六頁「写真ドキュメント（日宇弘海氏撮影） 佐世保引揚援護局―入港から帰郷へ」より引用

原典の説明文：二〇年一月一四日の第一船から、二五年五月一日の閉鎖まで一四〇万人の引揚者を迎え、送り出した佐世保援護局では、この間二一六隻の引揚船が入港。その度に同じ光景がくり返された。これは多忙を極めた二一年の記録である。

原典の写真説明：いよいよ上陸。米軍の厳重な監督をうけた。

51頁・『戦後引揚げの記録』若槻康雄 時事通信社 一九九一年二月一〇日より引用

原典の写真説明：満州引揚げ基地コ口島にて 苦難の逃避行の末、引揚船に乗りこむ幼女（昭和二年七月・同地棧橋）

撮影者：飯山達雄。『小さな引揚者』（九〇頁参照）の裏表紙になっている。

（注：表紙及び本文に引用した筆者の写真はいずれも中国に渡る前のものです。引揚げの際写真の持ち帰りが禁じられていたため、当時の写真は残っていません。また、本書は筆者の体験を基にした創作です。）

関連参考資料

1 『ホームに座り込んだ引揚者』

『敗戦・引揚げの慟哭 遙かなる中国大陸写真集』³

飯山達雄、国書刊行会、昭和五四（一九七〇）年一〇月五日、

一三六頁を引用。

原典の写真説明：プラットホームで 博多駅へ来てもう二時間もたった。ホームに座り込んだ引揚げ者たちの話題は、これからの生活の青写真。
（1左の図版は扉）

2 『図説「戦争の中の子どもたち」』（前出）

3 『北京の日本学校』北京城北日本学校誌

小川一朗 朝文社 一九九七年七月 口絵より引用

原典の写真説明：城北校の校舎（一九四四年）

4 『従軍カメラマンの戦争』（前出）

六三頁より引用

原典の写真説明：戦友を葬る。昭和十三年一〇月、大別山系戦の直後。この写真も銃後の戦意を損なうとの理由で発表禁止とされた。





5 『検証・満州一九五四年夏 満蒙開拓団の終焉』

合田一道 扶桑社 二〇〇〇年八月一〇日

二二六頁より引用

原典の写真説明：日本人開拓団の墓地の跡

目次

『北満農民救済記録』を片手に――はじめに、に代えて

第一章 ソ満国境に吹く風

突如、ソ連軍が侵攻

ソ連軍の戦車と見誤り、自決

霞城集落の集団自決

避難民を襲う群れ

満蒙開拓に新天地を求めた日本

国策としての大量移民団

第二章

ソ連軍に襲われて

トーチカに刻まれた遺書

戦鬪に巻き込まれた哈達河開拓団

関東軍に見放され、集団自決

麻山の谷間の石ころ

死の淵から這い上がった姉妹

血塗られた開拓地

沖河開拓団の悲惨

死体の山、足が動いた！

第三章

第四章

祖国を前に引揚船内で死ぬ

病魔に食い尽くされた三股流開拓団

目を覆う死者の群れ

墓は松花江の流れ

散りぢりになって壊滅した南靠山開拓団

相楽悦子さんの数奇な運命

生か死かの馬太屯開拓団

二つの開拓団がたどった道

集団自決した小古洞開拓団

“人身御供”になった女性

略奪と暴行の開拓地

七割を超す死者の群れ

暴民の標的とされた開拓団

難民であふれる伊漢通

二つの日本人公墓

凄惨、天理村開拓団

いまも姿を留める天理教教会

暴民の襲撃にさらされる

ソ連軍、男を集めて連行

“哈爾濱忠霊塔事件”

悲惨な越冬地の死

道端に立つ日本の鳥居

密林の置き去り

第七章





第八章

混迷の大青森郷開拓団
大密林の恐るべき決断
置き去りの人々を探す
敗戦から一か月後の集団自決
決死の哈爾濱行き
義勇軍から義勇隊へ
少年が書いた唯一の記録
中隊長と呼ばれた教育者の涙
開拓の花嫁たちの末路
磨刀石の戦いと「岸壁の母」
お腹の子を随ろす
三千キロに刻まれた慟哭——あとがきに代えて
満州開拓関係年表

6 二〇〇八年八月三日、朝日新聞朝刊一面政府広報。

政府広報

お預かりしている通貨・証券類をお返しします。
財務省

税関では、終戦後に外地より引き揚げてきた方々からお預かりした通貨や証券類などをお返ししております。今なお引き取り手が無いものが多数ありますので、ご家族の方でもお心当たりがございましたら、最寄りの税関までお問

い合わせ下さい。詳細は税関HP (<http://www.customs.go.jp/>) 及び

以下、税関ホームページ「通貨・証券等の返還」

http://www.customs.go.jp/news/hokanshoken/index_shoken.htm

通貨・証券等の返還

税関では、終戦後に外地より引き揚げてきた方々が、税関などに預けられた通貨や証券などをお返ししておりますが、今なお引取り手がなく、保管されたままになっているものが多数あります。

ご本人はもとより、ご家族の方でもお心当たりの方は、お気軽にお問い合わせください。

税関でお返ししている通貨・証券等は次のものです。

●上陸地の税関・海運局に預けた通貨・証券類（上陸地取扱保管物件）

●帰国前に在外公館や日本人自治会等に預けた通貨・証券類のうち、その後日本に返還されたもの（外地扱保管物件）

通貨：旧日本銀行券、旧日本軍軍票等
証券類：国債、公社債、郵便貯金簿、預金証書、生命保険証書等

(7 保管証券類写真)

お預かりしている
通貨・証券類を
お返しします

税関では、終戦後に外地より引き揚げてきた方々からお預かりした通貨や証券などをお返ししております。今なお引き取り手が無いものが多数ありますので、ご家族の方でもお心当たりがございましたら、最寄りの税関までお問い合わせ下さい。詳細は税関HP (<http://www.customs.go.jp/>) 及び

10



9

8



返還請求・お問い合わせは、ご家族の方でも構いません。返還の請求には、税関または海運局が発行した「保管証」、総領事館などが発行した「預り証」が必要ですが、ご本人のものであることが確認できれば、それらの書類がなくてもお返ししています。また、実際に預けたかどうか不明でも調査できる場合があります。

8 『えっちゃんのせんそう』

<http://www.cinema-indies.co.jp/echan/index.html> より引用

原典の写真説明：花園在満国民学校 原作者・岸川悦子さん（えっちゃん）が通っていた小学校。敗戦後は、日本人の難民収容所として使用された。現在は、中国の軍事施設となっている。

9 『検証・満州一九五四年夏 満蒙開拓団の終焉』（前出）

二一四頁より引用

原典の写真説明：哈爾濱の新香坊の義勇兵訓練所。後に難民収容所になった。

10 『いちゃんは引き揚げ少年だった』坂本龍彦

岩波ジュニア新書三二〇 一九九九年五月二〇日

●カバーより：

一九四六年秋によく引き揚げてきた少年は、「貧しい異邦人」へのまなざしの中、「満州」での切実な体験の意味を問い続け、人間や日本社会を見る目を育てながら成長していく。好評の前著『孫に語り伝える「満州」』に続いて、あの戦争を日本人が自らにどう位置づけるべきかを問う、「心と体に刻まれた歴史」第二弾。

●「あとがき」二二一～二二二頁を引用

岩波ジュニア新書の前著『孫に語り伝える「満州」』が本になってから、私には心残りのようなものがありました。生と死の境目を歩いてきた少年の私の難民生活が、その後の私の成長にどんな影響を持ったのか。自分ではつきりと確かめて、子や孫に伝える必要があると思ったからです。たしかに、捨て身の生き方といていい姿勢や、ひどい貧乏にもネを上げないしたたかさは身につけてきたようでした。その代わり、生活のすみずみにまで気を配って、生活を愛し楽しんでいくようなゆとりや繊細さは、どこかへ置き忘れてきたかな、とハツとすることもあったのです。

“満州”からの引き揚げ者は一般人だけで百数十万人に達しています。そのうち、私たちのようにまだ成人に達していなかった世代は六、七十万人になるのではないでしょうか。ことに十三、四歳だった私たちは、日本へ帰ってきて

13



12



12



11 11



●一四二〜一四三頁 宮本康二氏の推薦文を引用
 往時茫茫夢幻の如し。「昭和二十年四月八日通化東昌校
 五年生 藤井先生入営記念」と母の手で書かれた一枚のセ
 ピア色に褪せた写真が私の手許にあります。若い先生と
 三十六名の子供達が緊張した面持で黙ってこちらを見詰
 めています。
 「懐かしいなあ、青パンツ、タダノツポ、シミ、ズチヨロコ、
 オーイ何とか云ってくれ」。すると、タニシキヨロリンが沈
 黙を破って語りかけてきました。あの頃のことを、十一歳
 の少年の声で、少年の言葉で。それが、谷島清郎著『赤い
 夕日の満州で―少年の日の引揚手記』です。
 著者の住んでいた通化市は満州には珍しく山紫水明の地
 でした。冬はスキーやスケートに、春はわらび採り、夏はギツ
 ギツと大きな声で鳴く鬼キリギリスに息をひそめて近付き、
 秋は草原に咲き乱れる桔梗の美しさに魅せられるのです。
 一転して、昭和二十年八月ソ連軍の満州侵攻、そして敗戦。
 日本兵のシベリア送り、奥地からの日本人難民流入、共産
 党統治下の生活、二十一年二月三日の通化事件、九月引揚
 開始、十月内地上市と、それはそれは混乱と困難と不安の

13 『赤い夕日の満州で ―少年の日の引揚手記』
 谷島清郎・文 ちばてつや・さしえマンガ
 新興出版社 一九九七年八月一五日

12 『母と子でみる 51 二〇世紀の戦争I』（前出）
 九〇―九一頁より引用
 原典の写真説明：市民が日章旗を振る中、保定に入場する日
 本軍 一九三七年一〇月一八日 (International News Photo)

11 『新版 私の従軍中国戦線』
 村瀬守保写真集へ一兵士が写した戦場の記録（前出）
 第3部 徐州作戦―麦と兵隊―六一頁より引用
 （避難民のトラックではなく、日本軍の行軍トラック）

知った「異国の丘」を、子どもながら熱唱した世代です。
 植民地として日本が支配した異国で、敗戦後に生きるつら
 さや頼りなさがわかってしまった“子どもたち”です。
 二〇世紀の歴史の傷口から広がった傷をおおうコブのよ
 うな世代、ゴツゴツとして少し肌合いの違ったその世代を、
 私は引き揚げっ子世代だと感じてきました。
 すらっと生きてこれず、たわめられ、しわめられて生き
 てきたこの世代は、「なにくそっ」と何度も立ち直ることが
 必要でした。
 その世代も今や高齢者になって、引き揚げた祖国での生
 活をも子や孫に記しておきたかったです。
 （後略）

16a



15



14



14



14



連続した時期でした。

引揚後も大人は生活に必死で、子供達もまた大変でしたので、満州の出来事を記録する心のゆとりはありませんでした。そんな中に谷島さんが小学五年から中学にかけて、このような記録を残しておられたということに畏敬の念を覚えます。これは、私たちが今は失ってしまった少年の心と目で書かれた貴重な記録です。

ご両親、年長者に対する言葉遣いの良さ、弟さんに対する心配り……、文中の随所にかつての日本人が持っていた一種なんとも云えぬ清々しさを感じます。ご一読頂ければ、二度と還らぬものへの愛惜の念にキツト共感いただけるものと思います、本書を推薦申し上げます。(通化・東昌小学校同級生 元婦人画報サービズ総務部長)

14 『戦時下の子どもたち』 太平洋戦争研究会 ビジネス社

二〇〇六年二月二三日

五七頁「ワレラ皇軍、勝ち抜クツ」より引用

15 『北京西郊収容所』 草川 俊 光風社文庫

一九九五年九月一〇日(初版は一九七八年ハードカバー)

●カバー裏面より

「敗戦直後の未曾有の混乱状況は、中国大陸に農業技術普

及のために渡り、各地で農民と接しながら力強く大地に根を張ろうとしていた一人の邦人を襲う。…変わり果てているであろう日本に引揚げるか、このまま大陸に残って骨を埋めるか、揺れる心情を描き切る。」

北京西郊収容所とは、引揚げ邦人の集結場所。著者は当時三一歳。敗戦後の北京の様子、右玄龍將軍の河北省北西部のユートピア計画、関東州に戻って樂土を築こうとする満州人の富豪、呼応する日本人医師と看護婦たち、収容所内の華北交通の天幕村や武装解除されて丸腰の日本兵、ルパシカをまとい思想関係の本を売る俄か古本屋などが描かれている。

16 『図説北京 三〇〇〇年の悠久都市』

村松伸・文 浅川敏・写真 河出書房新社

一九九九年一〇月 九四頁より引用

原典の写真説明：「無邪気」に遊ぶ「淪陥時期」の日本人小学生たち。

(「淪陥時期」：本文より)

「(前略) 日本軍が北京を占領するのは(一九三七年)七月二九日、いわゆる「北支事変」である。このときから日本の敗戦までの約八年間、中国人たちは北京の『淪陥(りんかん)時期』と呼んでいる。(後略)」

16b



17



18



19



19



17 『カムカム エヴリバディ』 平川唯一と「カムカム英語」の時代
平川 冽 日本放送出版会 一九九五年五月三〇日

18 『みんなのカムカム英語』 平川唯一 毎日新聞社
昭和五六（一九八二）年四月五日 一八二頁より引用

《カムカム英語の特色》 福田 昇八

平川唯一講師担当のNHK英語会話講座は不思議な魅力
を備えた番組であった。証誠寺の狸囃子のメロディにのっ
てカム・カム・エヴリバディで始まり、レッオール・カム・
エン・ミータゲン、シンギング・ツラ・ラ・ラで終わる
夕方の一五分間は、いながらにして生きた英語を楽しく学
べる時であった。毎週の教材は平川講師苦心の作で、ユー
モアに満ち、ほのぼのとした情感があり、講師の声はやさ
しく、暖かく、情熱にあふれ、聴く者の心をつかんでな
さなかつた。実際この一五分間には、「英語を教えること
と一世の中を明るくすること」の二つの願いがこめられて
おり、この目標は両方とも達成されたのであった。当然な
がらこの番組は圧倒的な人気をもって迎えられ、これは全
ラジオ番組のベスト三に入り、平川唯一の名は当時、マッ
カーサーと吉田茂に次いで三番目に有名であったという。

昭和二一年二月から五年間続いたこの番組は、二六年二
月まででNHKの放送から消え、それから三〇年の歳月が

流れた。（以下略）

19 『昭和の戦争 ジャーナリストの証言』 1 『日中戦争』
責任編集 松本重治 講談社

昭和六一（一九八六）年四月二五日 五一頁より引用
原典の写真説明：クリークを利用した軍用物資の輸送（上海
近郊で）

目次

◎視点

日中戦争 松本重治（同盟）

◎証言

I 下剋上ここに極まる

日中戦争と陸軍

II 中国大陸の邦字紙始末記

軍・政記者の北京七年

III 上海戦から南京攻略へ

IV 日中戦争従軍記

V ハルビンの落日

VI 血ぬられた草原・ノモンハン
年表

富岡鍵吉（朝日）

関原利夫（読売）

前田雄二（同盟）

林田重五郎（朝日）

竹田巖道（満州国通信）

入江徳郎（朝日）

光井祐二（朝日）



20 『昭和の戦争 シャーナリストの証言 7 引揚げ』

責任編集 松岡英夫 講談社

昭和六一（一九八六）年三月二五日

目次

◎視点

六百万人の民族移動松岡英夫（毎日）

◎証言

I 開拓団死の行進

麻田直樹（満州国通信）

II ———いつか帰る夢のふるさと

満州、その苦難の日々

望月百合子（満州日日）

III 中国残留日本人孤児

荒武一彦（毎日）

IV シベリア抑留記

桐島正式（朝日）

V ———インドネシアからの引揚げ

志道好秀（朝日）

「独立戦争」の渦中で

齋藤申二（読売）

VI 南方からの引揚げ・復員

谷村幸彦（満州日報）

VII 北鮮脱出記

光井祐二（朝日）

●年表



21 『大連 空白の六百日 —戦後、そこで何が起ったか』

富永孝子 新評論 一九八六年七月三〇日

（本文五三三頁、口絵写真六頁の克明な記録）

●「はじめに」2〜3頁を引用

（前略）

国・共内戦の激化で交通は杜絶、陸の孤島と化した大連、二つの中国の間で動揺する市民、高騰する物価、食糧危機。八〇パーセント失業状態となった邦人たちの必死の生存作戦。満洲から移入した同胞難民の窮状。力尽き、矢折れる寸前、やっと引揚開始！。

大連は満洲奥地の麻山（まざん）事件に象徴されるような、極限の恐怖にさらされた日々ばかりではない。まだ、考えて行動するだけの余裕はあった。

だが、すでに異国となった土地で、異民族の支配のもとに過ごす敗戦国民の一年半の不安は、かつて体験したことのない試練であった。

先の見えないトンネルに押しこまれ、扉を閉じられたような日々であった。

当時十四歳。女学校二年の私は、秘かに戦争を批判しながらも、表向きは学校長という職に在る父、そして母と姉妹の家族とともに、この大連で歴史の転換を体得した。それは後の私の四十年にも匹敵する、きびしく、重い明け暮れであった。

しかし、世間知らずの娘が、複雑多岐なその頃の社会状況を理解できるはずもない。

なぜあんなったのか、どうしてこうした結果に終わったのか、私の青春のスタート地点となった大連の戦後は、私



に疑問と謎だけを残したままであった。

なんとかあの未知の部分と、記憶の空白を埋めておきたい、私は切望しつつ時を重ねた。

個人の体験を記したものはあった。が、新聞もラジオもないあの一年半の大連の全貌を正確に記した著作はなかった。

外務省外交資料館に、旧・満州各都市、新京、ハルビン、奉天などの終焉は、各領事館からの報告として残されている。しかし、大連に関しては、昭和二十二年一月、大連からの引揚船永祿丸にロシア語通訳として乗船していた外務省通訳生岡崎慶興の「同船上において蒐集した情報・大連事情」と題した書類のみであった。その表紙には「取扱注意」の印が押してあった。これが四十数年日本統治下にあった関東州大連の終幕にかかわる唯一の公的資料とは。

昭和五十五年、父・徳重伍介の三十三回忌の折、偶然当時の父の日記の一部が遺されているのを知った。それは私に決意を促した。

私は当時のおとなを次々に尋ね歩いた。そして得た結論は「おとなたちは書けなかった」ということである。引揚後もおとなたちには生活との戦いがあった。無一物になった引揚者にとつて祖国の風は冷たかった。当時の記録など残す余裕もないまま、おとなたちは世を去った。もうひとつ、渦中に在って活躍したおとなたちには「書くわけにはいかない事情」が多くあった。そのために「書けなかった」という。(後略)

22 『こども』佐野洋子 一九九〇年四月五日

福武書店文庫版

北京で過ごした幼年時代が描かれている。グルトーゲンのミルク 北京大学の病院 干しなつめいりのむしパン チャーガオ屋 ラクダ 水屋 あひる 万寿山 アマ ヤンチョ コウリヤン畑 兵隊さん 桜のやに……

●『こども』(リプロポート 一九八四年六月一五日)の奥付より引用

さのようこ／絵本作家・エッセイスト。一九三八年北京生まれ。武蔵野美術大学デザイン科卒。一九六九年ベルリン造形大学でリトグラフを学ぶ。絵本に『わたしのぼうし』『百万回生きたねこ』エッセイ集に『わたしの猫たち許してほしい』『アカシヤ・からたち・麦畑』等がある。

●文庫版『こども』の後書きを引用

《(前略)……しかし『こども』はどうも妙な本である。

エッセイでもなければ小説でもなく、童話でもないし思い出話でもない。いつてみれば素描集の様なものかも知れない。『こども』は『わたしが妹だったとき』という作品の背景にあった現実ではないかと思ってみたり、あの時しか書けなかったのだとも思うのだが、もう仕方ない。

『こども』の中で私は「支那人」「あま」という言葉を使っ



(前略)

引き揚げ船の中で出された初めての食事は、さぼと大根の入っているおじやだった。巨大なたるの中にそれは入っていて、大きなひしゃくで、家族が持ってきたなべの中に流しこまれた。

そのおじやが米であることに、私たちは感激した。おじやはねっとりして甘かった。パサパサしたコーリヤンのおかゆや、とうもろこしの団子を食べていた私たちに、米のねばりは、心からの充足と、これから帰る日本への希望を与えてくれた。私は次の食事を待ちのぞみ、アルミのおわんを、洗う必要のないほどなめつくした。

私はその食事以外に何ものぞまなかった。

貨物船の船底は荷物がびっしりとうまり、その間に、人が荷物によりかかって坐っていた。荷物によりかかって人々が眠り、昼も同じ姿勢でほとんど身動きが出来ないのだった。私のとなりに、ひどく年とった老婆がいた。彼女は小さくまるまっとうずくまっとうでいた。彼女は歩けないほど年とっていたので、甲板のトイレに行くときは、息子の背中にくくりつけられた。彼女はうずくまっとうままボソボソ何か言っていた。いつも同じことを言っているのだった。

「おすしが食べたいよう、おすしが食べたいよう」

「内地にかえたらね」

息子の奥さんがいう。



ているが、あえて「中国人」「お手伝いさん」という言葉には言い換えなかった。子供るとき、私はそれ以外の言葉を知らなかった。『こども』を私は一九三〇年代から一九四〇年代初めにかけて中国に住んでいた子供の視点で書いた。いま私はそういう言葉は使わないし、使ってはならないと思う。

東洋史を専攻し、中国の農村慣行調査という仕事をしていた父は、中国の悠大な歴史と国民性について、多分とても深い理解を持っていた日本人の一人であったことを、私は誇りに思っているが、その父でさえ「中国人」という言葉は知らなかったと思う。あの時代、私たち日本人が中国にとつてどの様な存在であったかという事実を私はごまかしたくない。》

●関連する著作：『わたしが妹だったとき』（偕成社 一九八八年）「重大な」存在であった兄とのかかわり／『右の心臓』（リプロポート 一九八八年一〇月二九日）引揚げ後、身を寄せた父の実家で兄を病気で失う／『アカシアからたち・麦畑』（文化出版局 昭和五八（一九八三）年一月三〇日）北京・大連での幼年時代、引揚げ後の田舎での生活、など

●『私の猫たち許してほしい』（ちくま文庫 一九九〇年八月二八日）一〇三〜一〇五頁から引用



25



26



27 27



「おすしが食べたいよう」

「もうすぐだからね」

それでもおばあさんは根気よく、「おすしが食べたいよう」をくり返すのだった。

あんなおいしい大根とさばのおじやがあるのに、私はおばあさんがぜいたくでわがままだと思った。

ある朝、目がさめると、私の横に灰色の毛布でくるくる巻かれたものが横たわっていた。毛布の両はしがひもでしばってあった。昨夜、私が寝ているうちに死んだおばあさんだった。二日ほど、毛布でくるまれたおばあさんは私の横にいた。海の様子が悪くて、船はなかなか日本に着かないのだ。息子はおばあさんをついで、甲板に上がっていった。はしごをのぼってゆく息子は、巨大なりの巻きをかついでいるようだった。海に捨てにいったのだ。(後略)

23 『北京の路地』(前出)

24 万寿山 海拔六〇m、昆明湖を掘った土で造った築山。拝雲殿、智慧海など仏の住む世界とされる。頂上に立つのが高さ二〇mの基段上にそびえる仏香閣。八角形の華麗な三重構造で西太后が巨費を投じて再建。

『ふるふ中国06 情報版』JTBパブリッシング 二〇〇五年八月一日より引用

25 『北京の碧い空を わたしの生きた昭和』小澤さくら 二期出版 一九九一年四月二五日

指揮者小澤征爾の母小澤さくらの体験を四男の幹雄が聞き書きしたもの。征爾は三男。家族と過ごした戦前戦中の北京時代、昭和一六年に引き揚げてきてからの空襲、戦後の物資不足の中での生活など、苦難までもが染しげな口調でつづられている。

26 『北京の思い出 一九二六―一九三八』
A Memoir of Peking Life アイダ・ブルーイット著
山口 守訳 平凡社 一九九〇年一〇月八日

アイダ・ブルーイット：一八八八年アメリカ人宣教師の娘として中国山東省蓬萊に生まれ幼年時代を中国で過ごし、教育を受けるためアメリカに渡り、一九一九年北京協和医学院のソーシャルワークの責任者として再び中国へ。以後一八年間を医学院で働く。英語と中国語のバイリンガルであっただけでなく、西洋文化と中国文化との対比においてバイカルチュラルであった。(訳者あとがきより抜き出し)

27 『日中戦争 日・米・中報道カメラマンの記録』

平塚枢緒編著 翔泳社 一九九五年七月二〇日より引用
写真説明：引揚船に乗る前の所持品検査を受ける人たち(漣沽で)

28



28 『天津の日本少年』 八木哲郎 草思社
一九九七年二月五日

著者：八木哲郎氏 一九三一年天津生まれの天津育ち。三井物産天津支店勤務だった父の転勤にともない昭和一九年（二九四四）六月北京へ。北京で敗戦を迎え昭和二二年引揚船で帰国。

同書前半は幸福だった天津の幼少年時代を、後半の北京では戦争に翻弄され両親を失い、人生の一時期が終ったことを実感しながら引揚船に乗るまでを、著者の当時の瑞々しい感性のままに克明に描いている。二七八～二九三頁に引揚げの具体的な記述がある。

29



29 『流れる星は生きている』 藤原てい 中央公論社 昭和五九年（一九八三年）八月一〇日

（これ以前の主な刊行 昭和二四年五月日比谷出版社／昭和五一年二月中公文庫）

30



30 『いのちの朝 ―ある母の引揚げの記憶―』 中谷和男
TBSブリタニカ 一九九五年二月一八日

●「序章 孝子との出会い」七～一三頁より
「（前略）子ども二人を死なせ、その骨箱を腰に巻きつけ、末っ子の久美子を胸に抱いて、毒薬ひと瓶と剃刀と主人の予科

時代の学帽だけ持って、そのうえ、一〇二人もの女の方や子どもさんをなぜか引き連れることになってしまつて、満州から、朝鮮半島をひた走り、日本までたどり着けるなんて。わたしはね、八〇年の生涯を振り返つてみると、これ、そうとう、幸せだったんじゃないかしら。人はどう思おうと、わたし自身はそうと信じる」

孝子はカラリと笑つた。笑い声の絶えない孝子である。
（中略）

「玉砕とかひめゆりの塔とか、いろいろございしましたよねえ、戦争のなかで。死というかたちしか選べなかつた方々は、本当にお可哀相と、ご冥福をお祈りします。自分で選んだわけでもない死というものに飛び込んでいく時の気持ち、それを考えると、全身に震えが走ります。」

でも、あの戦争の最中に、生きるも死ぬも勝手にしろと放り出され、変な表現ですが、生きることだけを、必死に思いつめていた人たちもいっぱいいたんですね、わたしたちみたいに」（後略）

●二二五～二二八頁「著者あとがき」を抜粋引用
（前略）長沢孝子の話を録音しながら、パソコンを叩きながら、わたしは思った。

（中略）

五〇年という歳月は一体何なのだろう。女性の描いた戦



争告発物の古典に藤原ていの『流れる星は生きている』（中央公論社）がある。長沢孝子と同じ時期にほぼ同じ道程をたどっているようで、ぜひ比較しながら一読していただきたい。そこには戦争への怨念、人間に対する憎悪と憤怒と涙があふれていて、感性のヒダをかき回されて、読み続ける勇気を喪失し、わたしは何度か本を閉じた。

（中略）

長沢孝子には、こうした憎悪とか怨念とか涙とかがない。人間の資質の違いだろうか、経験した苦悩の大きさの違いだろうか。たしかに長沢は、物語を始めるにあたって、「一瞬一瞬を生き抜こうとする時の、その時噴き上がってくる人間の命の力っていえばよいのか、それはもう、物凄いなと思う。苦しみ、生命の限界を超えてしまっ、もう死ぬしかない状況に立ちいたった時、その極限の苦しみを麻痺させてくれるんですもの」と語っている。

また長沢は、戦後の五〇年間に、未来を生きるうえで不要なものほとんど切り捨て、忘却という沼にどんどん捨て去っていった。彼女には過去にしがみつきたいこだわり続ける執念とか怨念とかがまったくない。八〇歳の今でも彼女には未来しかない。

だからこそ、彼女の語りには、戦争告発物を超えた普遍性とか生きる指針のようなものがあるのだろう。

（後略）

31 『ボクの満州 漫画家たちの敗戦体験』中国引揚げ漫画家の会編 亜紀書房 一九九五年七月二六日

執筆者

祖国はなれて

「メーファーズ」——これでいいのだ!!

中国原体験の光と影

ぼくの満州放浪記

記憶の糸をたぐり寄せて

わが故郷、大連

豆子ヨロさんの戦争体験記

上海に生きて

座談会ボクの満州・中国

あとがきにかえて

上田トシコ

赤塚不二夫

古谷三敏

ちばてつや

森田拳次

北見けんいち

山内ジョージ

横山孝雄

高井研一郎

執筆者一同

石子順

32 『北京收容所 私の獄中日記』佐藤亮一 サイマル出版会

一九八六年二月（終戦後に河出書房、荒地出版社から刊行され絶版となっていた旧版の改版）

●カバーより引用：

一九四六年四月、従軍記者であった私は、理由もわからぬまま突然、国民軍憲兵にとらえられた。蒋介石主席の「暴



に報ゆるに寛容と温情を以ってし……」の布告にもかかわらず、日本軍武装解除をとともに、北京は略奪、暴行、日本人・漢奸狩りの、百鬼夜行の府と化していた。

奇怪な「復讐」裁判、刑場に引かれていく同室の「戦犯」たち、金に左右される獄吏や役人、酷寒酷暑と無残な食事——この運命的な獄中体験を私は克明にメモし、中国服のなかに秘めて命がけで持ち帰った……。」著者

林語堂『北京好日』、リンドバーグ『翼よ、あれがパリの灯だ』、チャーチル『第二次世界大戦史』、バターフィールド『中国人』など一六〇点に及ぶ名翻訳で知られ、〈国際翻訳大賞〉を受賞した著者は、日中戦争下、毎日新聞特派員として中国戦線を取材、終戦・国共相克の混乱のなかで抑留された。

これは、そのときの苛酷な体験を綴った獄中日記で、戦争が残した傷跡の記録である。

33 『一四歳の眼がとらえた 戦争・狂気の時代 「鬼畜米英」から「一億層懺悔」に至る逆転の舞台劇!』
岡健一 光人社 二〇〇三年一〇月二六日発行

●プロローグ——狂気の凄い時代だった(抜粋引用)
物心ついた頃、多分、五歳くらいの頃だと思うが、すでに戦争が始まっていた。支那事変(日中戦争)である。

小学校が国民学校となり、その四年生の時、真珠湾の奇襲で、太平洋戦争(当時は、大東亜戦争と呼ばれていた)が始まり、中学(旧制)で勉強したのは一年生の一学期だけで、中学二年・一四歳の夏、戦争が終わるまで、勤労学徒として農山村で、敵の上陸予想海岸で、そして海軍軍需工場での厳しい労働に明け暮れた。

そして八月一五日を境に、一八〇度の方向転換。何がどうなるのか、一四歳の少年の頭では想像すらできなかったが、ひもじい空腹はいつまでも続いていた。

戦場で敵兵と直接戦うことはなかったが、連夜の空襲警報のサイレンの恐怖の下でのひもじい生活と激しい労働は、すべて戦場と連動していた。

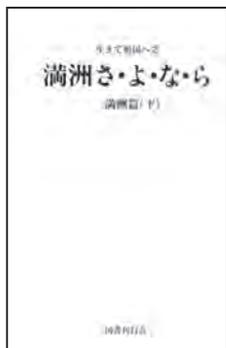
(中略)

「何も知らされない時代」「知る手段が何も無い時代」の中にいた子供、そして神話と軍国主義一色の教科書を使って行なわれた学校教育の中にいた子供は、どういう大人になつていったかを記してみたい。

私たちはごく自然に、水の流れに身をまかせるように、軍国少年に育つていったのであった。ある日を境に突然、軍国少年に変身したわけではない。

「洗脳」とか「マインドコントロール」といった言葉は、いずれも戦後のものであり、誰からも洗脳されたり、マインドコントロールされたわけではない。ごく自然にである。

37



36



35



34 34



僅かな情報と少国民（年少の国民）教育、そして敵愾心を煽る歌唱指導や強烈なスローガンの中で、軍国少年が育まれた。

物心ついたときには「戦争」の中におり、その「戦争」は次第に膨らみ、生活は少しずつ苦しくなっていた。

特に食べ物である。食べ物は次第に少なくなり、配給制になり、その配給量は日を追うごとに少なくなり、遅配、欠配と続き、遂に底をついた。

食べ物をはじめとする生活物資の窮乏の下降カーブは、このように「徐々に、少しずつ、段階的」に進められたので、ある種の馴れとあきらめが日常になっていた。

（中略）

敗戦によるコペルニクスの転回の事例を、何としても書き留めておきたいと思う。（後略）

34 『母と子でみる 20世紀の戦争II』（前出）

九一頁より引用

原典の写真説明：湖南省の戦線で中国軍の捕虜となった日本兵Ⅱ一九四四年二月二日（ACME）

35 『昭和20年8月20日 内蒙古・邦人四万人奇跡の脱出』

稲垣武 P H P 研究所

昭和五六年（一九八二）年八月二六日

●まえがきより引用

私がこの本を書くきっかけになったのは、元陸軍少佐飯村繁氏の示唆からである。飯村氏と雑談の席上、終戦後の満州の惨状の話になり、私が「あのような事態を、何とか未然に防げなかったものでしょうか」と残念がると、飯村氏は「お隣りの内蒙古では、駐蒙軍の一箇旅団が、ソ連軍の機甲部隊を阻止し、その間に張家口から在留邦人が、無事引揚げたようですよ」と言われた。私は、驚いた。（後略）

37 36 『生きて祖国へ』 1 『流亡の民』 満州篇（上）（図版は扉）

2 『生きて祖国へ』 2 『満洲さ・よ・なら』 満州篇（下）
引揚体験集編集委員会 国書刊行会
昭和五六（一九八二）年四月二〇日

1 流亡の民 目次

口絵（岩田ツジ江／画）

第一部 満洲篇

第一章 敗惨の民族

I 満蒙開拓団の末路

第一三次満洲興安東京開拓団の最後 坪川秀夫

札蘭屯からの逃避行 米 栄子

満洲開拓団長としての引揚体験記 堀 忠雄

II 苦難の逃避行



あとがき

2 満州さ・よ・な・ら 目次

口絵(岩田ツジ江/画 福嶋廉人/画)

第一部 満洲篇(続き)

第四章 混乱の街

鴨緑江敗戦悲話 佐倉啄二

敗戦の動揺 桜田俊雄

チチハルでの抑留生活 景政ヨシ子

避難民の回想 中谷藤市

敗戦の惨 足達芳雄

新京からの引揚げ 阿部善一

風と雲との間 日比房雄

内戦の満洲をぬって大連へ 藤木武夫

「鍋釜を探しなさい」 中柴保一

水の花 竹内みさお

長春在留日記抄 小西清規

第五章

日本人難民収容所

桃井喜代二

錦州省阜新市第一収容所の回顧

日本人の子供売り 山本清子

傷痕の思い出 前田牧信

赤い夕陽の北安の街で 長岡喜春

第二章

難民となる

黒河からの引揚げ記録 榎ウメ子

牡丹江脱出から引揚げまで 浜口けい子

母一人五人の子を連れて 松岡このむ

私の終戦追憶の記 岡本玲子

母親奮闘の引揚げ記 林つき

第三章

悔恨の満洲

母の思い出 菊池弘之

北満に散った鋏の戦士 榛葉忠男

家族の消息をさがして 小川三郎

北満慕情 細野淑子

五つの石 河野千晴

中国人へ嫁いた妹 平渡孝子

東寧街を後にして 渡辺万成

銃を捨てたとき 河野寛治

流浪の果てに 佐藤ひで

さらば開拓地よ黒土よ 窪田としみ

悪夢

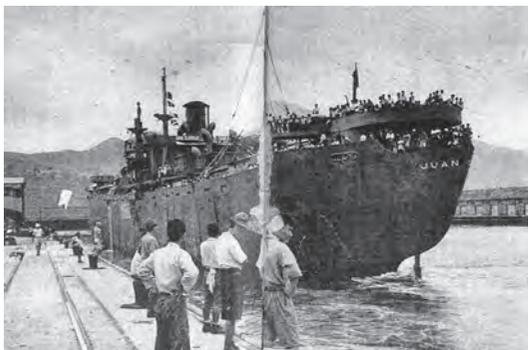
西行頼直 佐藤茂夫

さすらいの満洲 遠藤福治

さらば弥栄よ! 伊藤静夫

帰りがかった故里 半田玲子

東満総省林口県龍爪村からの逃避行 羽柴芳太郎



40 『在外邦人引揚げの記録』(前出・37aの図版は扉一九二―一九三頁より引用
 原典の写真説明：米軍貸与のリバティイ

●プロローグから抜書き
 《ハルビンに故郷を追われたエミグラント(無国籍ロシア人)の街だったからこそ、哀しいほど美しいロシアの匂いが息づいていた。》
 《夫にとつて、私にとつて、そして私たち家族にとつてハルビンで暮らした一部始終がどれほど貴重なものだったかを改めて思う。
 昭和十年から二十一年までのたった十一年のハルビン。でもそれはまさに二十代の私の青春そのものだった。同じこの場所にその面影が消えてしまった今も、私の心の中にはすべてがあざやかに刻まれている。》



38 『昭和二十一年日の全記録』 占領下の民主主義』 講談社
 平成一(一九八九)年四月二〇日
 「米中、米ソ協定後の引き揚げ」
 五〇頁より引用

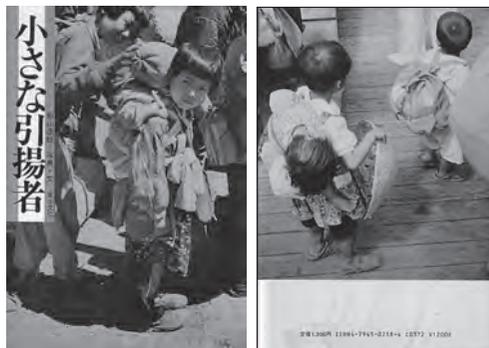
第六章 満洲よさらば
 奉天にたどりついて 佐藤ひで
 奉天朝日区朝日街地区の敗戦前後 亀谷友二郎
 ハルビンから錦州まで 岩田ツジ江
 内地に帰ったものの栗脇たつ
 大連地区よりの引揚げ 小沢佐智子
 白城子からコロ島までの一年間 竹重武二
 三粒の小石 木村郁子
 ある青春の一夜 三浦敬大
 子チハル引揚顛末記 中村英五郎
 中国篇
 第二章
 第七章
 北支・中支からの引揚げ
 奉仕に明け暮れた日々 柴田惇志私
 蒙古辺境から博多まで 根本清蔵
 大同からの引揚げ記 長谷川克郎
 開封引揚げの記 河野亮
 救護看護婦としての引揚げ記録 大根あい
 上海引揚げの思い出 中津彰教

39 『ハルビンの詩(うた)がまきこえる』
 加藤淑子著・加藤登紀子編 藤原書店
 二〇〇六年八月二五日
 ●著者は一九三五年に満鉄勤務の夫と結婚し、東方の小パリと言われる美しい街ハルビンに渡り、終戦後一九四六年の引揚げまでの二年間を過ごした。ロシア人との交流、三人の子の出産と子育て、引揚げ時の苦難が描かれている。



41 『中国からの引揚げ少年たちの記憶』

中国引揚げ漫画家の会編 ミナトレナトス
二〇〇二年六月二〇日より引用
原典の写真説明：引揚者送還のために米国が日本に貸与した
リバティ型輸送船（米国国立公文書館資料）



42 『小さな引揚者』飯山達雄 写真・文

草土文化 一九八五年八月一日
九四〜一〇三頁の「カメラをとおして見た引揚者の姿―あとがきにかえて」に飯山達雄が民間人引揚者の惨状を撮影し、当初動こうとしなかったGHQに突きつけた経緯が書かれている。『敗戦・引揚げの慟哭』（一九七〇年）にもう少し詳しいものがある。

「あとがきにかえて」より抜粋引用

●置き去りにされた一般人

太平洋戦争が終わったとき、朝鮮、満州（いまの中国東北部）、中国にいた日本人のうち軍人や軍に属する人たちは、アメリカ軍が用意した船でいち早く日本に引きあげました。ところが、軍に属していない多くの日本人は、戦争が終わった翌年になっても日本に帰れず、大陸に残されています。朝鮮半島に七十万人、満州、中国に百万人いたはずの日本人のうち、朝鮮半島南部と満州南部にいた一部の日本

人だけが引きあげ、あとは置き去りにされていたのです。ソ連との国境に近い満州の開拓団などから逃げてきた人びとは、とちゅうで襲われたり、飢えや寒さのために家族が生き別れてしまったり、親を失う子どもたちもたくさんいました。そのころ、大陸に残された日本人を日本に運ぶのは、戦争でたびればたオソボロの船を使つてのろのろとおこなわれていました。そんな調子ですから、福岡県の博多港と大連の間を一往復するのに十日間もかかり、しかも一回にわずか五千人しか運ばませんでした。これでは一年間かかっても十八万人、大陸に残された人びとすべてを運ぶには十年もかかってしまい、飢えと寒さと死の恐怖におのっている人びとをどうい救いたすことはできません。

ところが日本の政府は、その当時日本を統治していたGHQ（連合国軍総司令部）に船をまわしてもらうことを頼んだのですが、「ボツダム宣言で日本軍人・軍属は送り返すことになっているが、一般日本人の送り返すことは条約にないので、GHQの責任ではない」と断られました。それ以来遠慮をして、引きあげに使う船を頼むのをあきらめました。その間に多くの日本人が命を落としたり、孤児になっていくことを思うと、居ても立ってもいられない気持ちでした。そこで、日本政府が腰ぬけのなら、私がもう一度中国大陸へ渡って、残されている日本人の実際のような写真を写真に写して、GHQにつきつけてやろうと決意したのです。

45



44



44



43



46



46

『東京大空襲の記録』東京空襲を記録する会編
一九八二年三月一〇日〈復刻版〉二〇〇四年八月一五日
三省堂 四六頁より引用
原典の写真説明：焼け跡を前に立つ黒い迷彩を施した国会議
事堂 一月二七日

野原になった上野方面を撮影。小柳が保存した戦争中最後の
写真。高所からの撮影は禁止されていたが、あったことを撮
影して記録するのがカメラマンの務めだと小柳は言う。

45

『従軍カメラマンの戦争』(前出) 二二二—二二三頁より引用
原典の写真説明：二〇年六月、神田明神から東京空襲で焼け

44

『1億人の昭和史 4 空襲・敗戦・引揚げ 昭和20年』(前出)
二〇六頁「佐世保引揚援護局―入港から帰郷へ」より引用
原典の写真説明：二〇年二月二十五日からDDT消費が始まっ
た。

43

『日中戦争 日・米・中報道カメラマンの記録』(前出)
原典の写真説明：日本人引き揚げ者の警護に当たる米海兵
隊員。これらの引き上げ者は青島から博多に向けて、毎日
三〇〇〇人がLSTで送られた。
『敗戦・引揚げの慟哭 遙かなる中国大陸写真集3』(前出)
著者略歴を引用)

撮影者：飯山達雄。
略歴：一九〇四年(明治三十七年)横浜生れ。一九三〇年(昭
和五年)ころから、山と未知の発見に心ひかれ、それらの
記録を写真で残すことを志す。以後、北朝鮮の処女峰に登
はん、満州、中国本土(昭和八年から一六年まで、各数回)、
内蒙古・ゴビ砂漠(昭和一三年から一六年まで、二回)と
大陸の旅を続けた。敗戦・引揚げ後、在満邦人の実情を内
外に訴え、引揚げを促進するため渡満した。

著者 木村愛二

一九三七年父山口県生れ。福岡県で育ち、一九四二年に北京に渡り、敗戦の翌年一九四六年に福岡県に引揚げる。

著者の父はセメント会社の技術者で、徴兵されなかつた代わりに、北京郊外の北支那開発株式会社の工場に出向。一家は単身赴任の父親の後を追って戦争中北京に住み、そこで敗戦を迎えた。敗戦後の收容所生活を経て北京から引き揚げる際、民間人である筆者の一家は、自分たちが身体で運べるものしか持ち帰れず、いわば「着の身、着のまま」北京から港までは石炭輸送用の無蓋の貨物列車、その先はアメリカの大量製造の軍用輸送船リバティで九州の佐世保港に送還されることとなった。港で上下を破いた袋を被せられ米兵からDDTを散布され、貰えたのは大人から赤ん坊まで含めて1人当たり新円の千円札が1枚だけであった。



父の務めた北支那開発株式会社は国策会社だったが、公務員でも軍属でもなく、そのため恩給ともまつた縁がなかった。九州にあった両親の自宅は、製鉄所が爆撃される時の延焼を避けるために、政府当局によって破壊されていた。



(筆者の父) 木村勲：戦前の旧制の帝国大学時代に九州大学工学部に学び、旧・浅野セメントに入社、中途、北支那開発公社に出向し、敗戦後、現・日本セメントに戻った。下関工場の生産課長から本社の生産課長として退職するまで、セメント工学の技術部門の職を歴任し、定年退職後に嘱託として付属研究所に通って研究を続け、九州大学工学部で博士号を取得し、鹿児島大学に工学部が出来た直後、主任教授として赴任した。当時の弟子が、その後、日本セメントの本社生産課長を継いだ。

著者略歴

木村愛二 (きむら・あいじ)

1937年生まれ

1955年防衛大学校（3期生）中退。

1961年東京大学文学部英文科卒。日本テレビ調査部を経て、自由業。

主な著書：『古代アフリカ・エジプト史への疑惑』（鷹書房）『NHK腐蝕研究』『湾岸報道に偽りあり』『読売新聞歴史検証』（汐文社）、『アウシュヴィッツの争点』（リベルタ出版）、『9・11事件の真相と背景』『イラク「戦争」は何だったのか？』『ヒトラー・ホロコースト神話検証』（木村書店）、『放送メディアの歴史と理論』『アフリカ大陸史を読み直す』『9・11 / イラク戦争コード』（社会評論社）

訳書：『偽イスラエル政治神話』（れんが書房新社）

季刊『真相の深層』（2004年4月創刊）編集・発行人

kimura

僕等は侵略者の子供達だった

2010年6月1日 初版第1刷発行

著者 木村愛二

発行人 木村愛二

発行所 木村書店

180-0006 東京都武蔵野市中町 3-6-21-302

FAX：0422-54-7476/ 振替 00150-4-568373

altmedka@jca.apc.org

<http://www.jca.apc.org/~altmedka/>

印刷製本：ピコ

装丁：綺羅星無限堂

shoten